説教20210815箴言9：1-6ヨハネ6：53-59

「復活する体」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

皆さん、「知恵や知識を食べる」と聞いてどう思われるでしょうか。「ちょっと聞きなれない表現だが、知恵や知識を自らのうちに取り入れて、血肉化して働かせる、といった意味だろうな、」と思われるでしょうか。つまり「知恵や知識を食べる」の食べる、ということを一種の比喩的な表現としてとらえる訳です。ところが、聖書では、この食べるということは比喩的であるどころかそのままずばりの事実です。例えばヨハネ黙示録には聖書の御言葉について「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」と記されています。又詩篇には「あなたの仰せを味わえば／わたしの口に蜜よりも甘いことでしょう。」と記されています。考えてみれば、アダムとイブが善悪の知識の木から食べてしまった始めより、聖書は知恵や知識を食べるものとして記しているのです。それは言ってみれば、朽ちることのない霊的な食べ物と言い換えられるでしょう。

　今日のヨハネの聖書箇所の最後、「これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。」と記されていますが、このイエス様のされた説教をただ、聞いてるだけで食べることがないならば、聴衆たちは変わることが出来なかったのです。実際、この説教を聞いて「実にひどい話だ」と言ってつまずいた弟子たちが多くいたと60節には記されています。

　このように私たちが御言葉を聞くとき、それを食べて味わうということは決定的に重要です。そのことは私たちが終わりの日にこの肉体が朽ちない永遠の命の体に復活することに関わっているからです。私たちには、この世にある間に、御言葉を毎日食べて味わい、日々、この体に摂取して、この体をかえられていくことが必要です。

　会計簿を考案し、全国友の会を設立した羽仁もと子さんは、その半生記で若かりし頃を回想して、次のように述べておられます。「明治女学校の中には、キリスト教思想があっても信仰はなかった。尼さんのほうの宗教には、神秘なあこがれはあっても、人間の血や肉の上に与えられる信仰ではなかった」と羽仁さんは言います。ここでの尼さんというのは仏教ではなくカトリックのことですので誤解なさらないでください。ともかくも、彼女は若かりし頃、キリスト教にいろいろ触れたけれども、キリストを食べて血肉化出来ずに信仰を持つことが出来なかったと言われています。では、そのころ彼女の心の中で本気に働いていたものとは何でしょう。ちょっと考えて見てください。　　　それは彼女曰く「本気に働いていたものは恋愛であった」ということです。このことは皆さん腑に落ちることではないでしょうか。恋愛と信仰の葛藤ということは、この朽ちる体と共にこの世を生きる私たちにとって避けられないことです。あのアウグスティヌスもこの葛藤の中で最大級に悩みぬいた一人であります。恋愛も信仰も、この世での朽ちる体に作用することです。私たちの体は朽ちて死ぬことを恐れ、又どこかしら痛みにさいなまれ、又、人肌恋しく悶々としてしまう様なやっかいなものです。ですが、その様なこの世の体が、御言葉を食べることによって、その体は朽ちない永遠の命を味わえるものへと変られていくことでしょう。アウグスティヌスの恋愛も泥沼化した最大級のものでしたが、彼は、御言葉を食べそれを味わうことで、その泥沼から抜け出すことが出来たのです。

　この様に私たちは、キリスト教を思想とか道徳というレベルでとらえるだけで、それを食べて味わうことが無ければ、信仰とか救いということにはつながらず意味がないのです。ですから、今、キリスト教に興味を持ちいろいろと勉強をされている方は、ぜひそのキリストの知恵や知識を食べて味わうようになさってください。

　しかし、そのキリストの知恵や知識を食べて味わうようになさってくださいと言われても、具体的にはどうすれば良いの、と思われるのが普通だと思います。悲しいかな、私たち人間は悪いことや淫靡なことには、ほうっておいてもひきつけられられてしまうのに、本当の幸せである朽ちない永遠の命の体のほうには、導き手や教える人がいないと向かうことが出来ないのです。今は、時代の流れからキリストの教会での説教がYouTube等を通して世の中に広く公開されておりますので、ぜひキリストを食べることの入り口として、教会の説教を聞いてみてください。そして教会に脚を運んで、キリストを味わい食べる様にしてください。

　さて今日の箴言の聖書箇所9章には、その良いこととと悪いことということが対照的に描かれています。旧約聖書1002ページです。9章を見ますと、小見出しの「知恵の勧め4」という節がよいことで、その次の次の「愚かな女」という節が悪いことです。誤解されないで頂きたいのは、「愚かな女」ということで、何か女性の愚かさを非難していると思われるかもしれませんが、そうではなくて、ここでは、人間全体が持つ、悪へいざなわれる悪い性質を主なる神は指摘されているのです。

　いかがでしょうか、この「知恵の勧め4」と「愚かな女」とを読み比べてみますと、主なる神はわざわざ、「浅はかな者はだれでも立ち寄るがよい。」意志の弱い者にはこう言った。という両者に共通した語句を挿入して、両者の異なるところを際立たせようとされておられる様です。私たちは誰しも浅はかなものですが、実のところ、この「愚かな女」の節のほうがすんなりと頭に入ってくるのではないでしょうか。この世の罪にまみれた私たちは放っておけば、こっちのほうの世界に親しんでしまうものです。しかしその世界の行きつく先は、記されている通り「深いヨミに落ちる」ことなのです。一方、「知恵の勧め4」に記された世界はキリストの朽ちない命です。５節の「わたしのパンを食べ／わたしが調合した酒を飲むがよい、浅はかさを捨て、命を得るために／分別の道を進むために。」は今日のヨハネ福音書でイエス様が教えられていることの先駆けでありましょう。

　朽ちる体を背負ってこの世を歩む私たちは、たとえ頭ではこの「知恵のすすめ4」のほうが良いに決まっていると判断できたとしても、体がいうことを利かないということが往々にしてあることでしょう。「深いヨミに落ちる」よりは永遠の命を得ることのほうが良いに決まっているのです。しかし、どうしても悪いほうを選んでしまう、ということがあるでしょう。

　この人間が持つ悪への傾きということは、アダムとイブの頃に始まりました。ここでも神の御言葉は食べることと深く関わっています。主なる神は言いました。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」何というおそろしい御言葉でしょうか。「食べると必ず死んでしまう。」と言われているのですから、何も無ければ、わざわざそんな恐ろしい木の実を食べることもなくアダムとイブはその他にたわわに実るおいしい木の実を食べて、罪を犯すこともなかったでありましょう。しかし、そこに蛇が現れてイブに言います。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」このそそのかしの言葉をイブは飲み込んでしまったのです。この時イブの体は、朽ちる体へとかえられたのかもしれません。イブの目には、その禁断の木の実がいかにもおいしそうに見えるようになりました。そして、その実を取って食べ、一緒にいたアダムにもそれを渡したので、アダムもそれを食べたのです。ここには、蛇のそそのかしの一言がイブの体の中に入り、イブの体を動かして、人間の間に神に背く行いが伝染してしまう成り行きが記されています。

　こう見てきますと、蛇の語ったそそのかしの悪い言葉によっても、人間がそれを食べて味わい、その体を変え、その行いを変えていったことが知られます。このように、神の御言葉に限らず、私たちが平生耳にする全ての言葉は、私たちの耳から入って、私たちがそれを食べて、体の深くに摂取するとき、よくも悪くも私たちの体を変化させるような、重大な作用をしていることが分かるでしょう。

言葉を食べて味わう、そういうレベルにおいて私たちは重大な岐路に立たされるでしょう。悪い言葉を食べ続ければ、私たちのこの朽ちる体はこのままなのです。逆に良い言葉を食べ続ければ、私たちのこの体は死に際しては朽ちてしまいますが、それから最後の日までキリストによって養われ、最後の日に朽ちない永遠の命を宿した体として復活することが出来るのです。

　キリストは、言われます。「取って食べなさい。わたしの肉を食べなさい」と。キリストは「決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」という最初の神の御言葉をある意味翻しているのです。キリストは「食べてはならない」という禁止ではなく、「食べなさい」という肯定の御言葉を私たちに与えられています。ここに新約聖書において現れた神の恵みによる救いが語られています。禁止ではなく肯定、私たちはその全き可能性を全世界に告げ知らせていってよいのです。

　イエス様は今日のヨハネ福音書の聖書箇所でそのことを熱く語っておられます。「わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

　私たちは、この世で飲み食いすることだけでは、永遠の命につながらないことは分かっています。それではこの朽ちる体と共に死んでしまうことでしょう。しかしイエス様は言われます。このパン、すなわちキリストを食べるものは永遠に生きると。

　ここで私たちはキリストの側から考えてみましょう。キリストは父なる神によってこの世に遣わされ私たち人間を救うという勤めをまっとうされました。その過程で、十字架に着けられこの世での朽ちる体を滅ぼされました。しかし、それがキリストの勤めの終わりではなく、キリストは最後の日に私たちと出会われます。十字架でのキリストの死はその朽ちる体の死であり、そこに永遠の命が与えられたのですが、又、キリストはご自身の体を私たちに食べさせ、与えつくされるのです。

　この世にあってキリストのものとされた私たちキリスト者も又キリストのようにその体を与えつくすような、自己放棄の道によって、永遠の命の宿る体へと変えられていくことでしょう。そのとき、私たちの今の体を苦しめる恐れや痛み煩悶は過ぎ去り、私たちはキリストの体として一致した平和の裡に、いることが出来るでしょう。

祈ります

天の父よ

主よ、わたしたちが聖書の御言葉を取り口にして、自分の中に取り入れて、私たちの心と体を変えてください。争いが絶えないこの地上で、私たちのこの体は苦しみあえいでいます。どうか、あなたの御心によって、この体を永遠の朽ちない体へと向かわせ、遂に御子によって永遠の命を完成させてください。

私たちはこの世にあって見えるものと見えないものを信じます。今は隠されていますキリストの血と肉が、私たちの内にとりいれられ、働いていることを信じます。どうか、私たちが、ただ見えるものによって縛られることなく、恐れと不安から解き放たれ、あなたが実現されようとされています平和の器として確かに用いられていきますように。

今、大雨と疫病が猛威をふるい、人々を苦しめています。どうかその一人一人をあなたがその御手を持って慰め、癒してくださいます様に。私たちがあなたから与えられた役割を、その時その時に確実に行い、あなたのみ栄が一つ一つ顕されていきます様に。

父と聖霊と